

オープンな社風が高度外国人材を輝かせる  
 チャレンジと夢を支えるのは、人との絆。



開発グループ

グナナセカラン・キショルクマル (29才)

Gnanasekaran Kishorkumar

●インド出身 ●アンナ大学出身 ●入社5年目

●担当業務: 水力発電プラントの開発・設計

## 国籍を意識することなく一人の社員として。優秀な人がいれば、迎え入れるのが信条。

中小水力発電プラントの専門メーカー、イームル工業株式会社。開発・設計・製造・据付工事から保守点検に至るまで、水力発電のオールインワン企業として70年以上の実績を誇る。再生可能エネルギーの利用が叫ばれる中、まさに注目を集める業界だが、「土地柄もあるのかもしれませんが、日本の人材マーケットのみに焦点を当てていると、弊社のような中小企業では優秀な人材を迎え入れることが難しいんです」と企画部企画総務グループ・山元啓史氏。それゆえ国籍を問わず採用することは、優秀な人材を確保するためには必須なのだという。「優秀な人がいれば採用する。それだけなんです」と、国籍を意識することなく一人の社員として迎え入れるのが信条だ。

グナナセカラン・キショルクマルさんの採用は、流体関連の研究をする学生を紹介してもらおうと広島大学に声をかけたのがきっかけ。流体力学が専門だったキショルクマルさんは、技術力を見込まれそのまま開発部へ配属となった。専門用語は、今ではキショルクマルさんが兄のように慕う山口直樹氏が日々の中で指導を行った。昼休憩には他の社員たちと共にキャッチボールを楽しむ。「外国人」を区別しないオープンな社風が、高度外国人材の働きやすさを支えている。

一方、高度外国人材だからこそ可能なことも多い。研究開発では「日本人だけのチームでは決して生まれてこない柔軟な発想力」で臆することなく意見を述べ、その姿は日本人社員へもいい刺激になっているという。また、海外業者との打ち合わせにも、専門的知識を背景に力を発揮している。「積極的に仕事に励んでくれて、技術力も、コミュニケーション能力も高い。会社に『馴染んでいる』という言葉がぴったりだと思います」。

## 偶然が重なって水力発電の世界へ。外国人扱いされないから楽しく働ける。

### ●日本はチャレンジ。自分を信じてくれた会社のために研究を。

インドの小さな村の出身だというキショルクマルさん。海外への憧れとともに「大学院に進むなら絶対外国に！」と新天地でのチャレンジの機会を探している際偶然小耳に挟んだのが、広島大学大学院のプログラムだった。フランス語ができるため当初はフランスも候補に入れていたが、「言葉が全くわからない国で修士号を取ることこそ、本当のチャレンジ」と日本を選択。奨学金制度の存在も決め手となり、広島大学大学院で流体力学の研究をすることになった。

来日後は想像以上に日本語に苦労をしたものの、アルバイトなどいろいろな体験をしながら上達。修了前に就職活動を行っていた時に、イームル工業が流体力学専門の学生を探しているという情報を聞いた。それまで水力発電関連への就職は考えていなかったものの、会社訪問の際研究開発の現場に魅力を感じ応募。「日本語が十分ではないので落ちたかもしれないと思いましたが、私のスキルを信じて採用してくれた。その時から、会社のためにまた新たなチャレンジを始めました」と振り返る。

希望の開発グループに配属されたキショルクマルさんは、研究に没頭。タービンの効率を高める水車を

設計し、実際に縮尺モデルを製作して、実験を行い検証するという作業が、何よりも楽しいという。また、2年前からは、新事業である水車発電設備のリバースエンジニアリング・プロジェクトにも参加。積極的に様々なアイデアを提案し、実験を行っている。

得意な分野で生き生きと力を発揮しているキショルクマルさんだが「これはぜひ言いたいんですが…ぼくが楽しく働けているのは、この会社の皆さんがぼくを『外国人扱い』しないからだだと思います」と身を乗り出す。「それに、日本語のサポートはもちろん、仕事でもプライベートでも、悩んだら何でも相談できる先輩がいます。道を間違えないように照らしてくれる『キャプテン』みたいな存在です」と尊敬と信頼を言葉にする。「そういう存在がいなかったら、言葉がわからない外国で働くというのは、難しいと思います」。



### ●夢は「イームル・インディア」の設立、名前が残せるような製品を造りたい!!

水力発電プラントのオールインワン企業である同社では、設計を行うとまず縮尺モデルを作り解析、検証を行い、その後工場で実物を制作。現地で据え付け工事を行い、稼働させる。「開発途中はたくさんの苦労がありますが、それを全部超えて、最終的に製品となって動いているのを自分の目で見ることができるのは、本当にうれしくて、やりがいを感じます」と顔をほころばせる。「自分が発案した新しい設計の水車を作って、『これは、キショルクマルが作った』と何年経っても自分の名前が残るような製品を造ってみたい。

それからたくさん経験を積んで、いつかその全てを注ぎ込んでインドに『イームル・インディア』を設立したいんです」。



(左)開発グループ 山口 直樹氏  
 (中)キショルクマル氏  
 (右)企画部 企画総務グループ 山元 啓史氏

#### 企業メッセージ

地方の中小企業にとって、優秀な人材を確保することがますます困難になっていますが、高度外国人材は、そこをカバーしてくれる貴重な人「財」です。言語の壁を越え、留学してまで学んでいる方なので、意欲も能力も高い。ものづくりグローバル人材育成協議会の制度は、間違いなく優秀な人材を採用することができる、企業にとっては貴重な機会だと思います。